

【出題意図】

問題Ⅰは、記号論の専門家によるエッセイからの出題である。＜問1＞＜問2＞ともに、著者の展開するコードをめぐる議論を手がかりとして、「法（法律）」（規範・規則）の根拠・機能等について、受験者自身の問題意識や考え方を問うものである。

＜問1＞は、筆者の議論の内容を、客観的かつ正確に理解したうえで、その内容を、的確な日本語によって、表現できる能力をみる問題である。

採点のポイントは、①「柔かいコード」と「堅いコード」の違いに関する筆者の見解を理解しているか、②「コード」と言語との関係、および、文化と言語との関係について言及し、「言語を考えることが、結果的には、文化を考えることにつながる」という筆者の見解の核心を捉えることができているか（「コード」について、解答者の主観的な考え方を述べるだけでは足りない）、③筆者の見解に対する解答者の理解が、説得力を有する文章で、的確に表現されているか、という点である。

＜問2＞は、法理学の専門家による【参考文献】の考え方を理解し、その内容と筆者の考え方との異同を正確に把握したうえで、受験者自身の考え方を、論理的かつ説得的に呈示できる能力を図る問題である。また、法と道德との関係を考えるにあたって、複眼的な考察（問題に則していうと、非法律家／法律家という両極の視点からの考察）に基づく、多角的かつ柔軟な思考能力の有無についても問うものである。

採点のポイントは、①「法律」と「常識」を、著者のいう記号（コード）論にあてはまると、どのように位置づけることができるかの検討がなされているか（例えば、「法律」は「堅いコード」といえるか、また、「常識」はどのように位置づけることができるか等という問題についての検討がなされているか）、②【参考文献】の見解の内容と、著者の見解との異同についての言及・検討がなされているか、③受験者自身の考え方が、著者や【参考文献】のそれと区別して、述べられているか、④筆者の見解に対する解答者の理解が、説得力を有する文章によつて的確に表現されているか、である。また、法律と道德との関係について、著者の採用するコード論に対する批判的な視点（受験者自身の分析視角）から、受験者自身の考え方を述べているものについても、その分析視角が説得的に根拠付けられている場合には、評価の対象に加えた。

※＜問1＞＜問2＞をとおして、筆者の見解を全く無視して、受験者自身の考え方を述べることに終始する答案や、自己の考え方についての根拠づけが全くなされていない答案などが散見された。

平成20年度（2008年度）法曹実務専攻（法科大学院）

A 日程入学試験・出題意図

「小論文」

問題2

【出題意図】

本問は、山岸俊男氏の著書『信頼の構造』（東京大学出版会、1998年）からの出題である。本書において著者は「集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する」というメッセージを示し、今後の日本社会は閉鎖的な集団主義の安心社会から、開かれた機会重視型の社会へ転換すべきであると主張する。開かれた社会では機会と人材のマッチングが適切になされるようになるから機会コストは小さくなり、社会全体の効率性が向上するというのが著者の主張の柱である。出題文はわかりやすい文体で書かれており、論理も明確である。しかし、本書を出題の題材として選んだ理由は、将来の法律家を目指す受験生に、わが国で生じている社会変化の本質を本書の記述を通して正確に理解する能力をみるだけでなく、本書ではやや否定的にとらえられている伝統的な集団主義の効用にも配慮する発想の柔軟性や効率性重視の現在の思潮を批判的に考察できる能力を確認するうえで適切と考えたからである。

問1は、著者の主張における基本的な概念を正しく理解できているかを問うものである。採点にあたっては、「集団主義社会」や「信頼を破壊する理由」についての理解の的確性や、限られた字数のなかで論理的に文章を書く力を重視した。問2は、著者が提起する「開かれた機会重視型の社会」の内容を適切に読み取るとともに、それを自分の言葉で的確にまとめる論理構成力や表現力をみるための設問である。そして問3では、著者の言う「開かれた機会重視型の社会」のメリットだけでなく、デメリットについても考察することを受験生に課し、物事を多面的に考察する能力と、自らの主張を論理的に構成し、説得的に論理展開を行うことができる能力を考査することとした。